

あなたの人生、あなたが主役

なぜ私たちには「殻(カラ)」があるのでしょうか。

どんな境遇の人であれ、カラの中にいる限り私たちは安全です。そもそもカラは私たちが外界から守るためにあるからです。この場合の「カラ」は比喩的な表現です。

手元の国語辞典では、「カラ(殻)」とは《外部をおおっている固いもの。外皮。比喩的に、自分を外界からへだてるもの》となっています(「広辞苑」第七版)。「殻(の中)に閉じこもる」ことを《性格的(かたくな)に自分だけの世界を守り、外部との交渉を避ける態度をとる》と説明しています(「新明解国語辞典」第八版、三省堂)。また、「殻を破る」とは《新しいことの妨げになっていた、古い考えや習慣を打破する》と書かれています(「広辞苑」)。

比喩の基となった生物界のカラについて考えてみましょう。多くの魚や両生類、鳥や爬虫類の卵は、外界の影響を防ぐためにカラが必要です。また、別の比喩として、「脱皮」という言葉を使うとわかりやすいかもしれません。

へびや昆虫は成長過程で「脱皮」します。カラを破るのと似ています。

カラの中では、外敵から遮断されたところで、成長に必要な栄養も補給されるのですから、生物が卵のカラの中にいることはどうしても必要な段階であると言えるでしょう。

生物学上のヒトである人間は、表面上は卵のカラとも脱皮とも無縁の存在ですが、赤ちゃんの時から大人になるまで少しずつ段階を経ながら成長を遂げます。その時々で目には見えないカラを破ったり、脱皮するようなものです。

卵を割らなければ、オムレツは食べられない

カラの中に閉じこもって、外部との交渉を避けていては、思うように成長できません。カラという限界を越えて大きく成長する勢いがあるのに、カラが妨げとなってしまいます。

カラというのは、私たちの行動範囲の境界です。私たちがまだ立ち入っていない見えず知らずの土地は、境界の外側にあるということになります。

では「境界の外」「カラの外の世界」は本当に行ってはいけないところなのでしょうか。

「外に行くな」というのは案外、根拠のない理由に基づいていたり、自分で勝手に「危険

だから行ってはいけない」と思い込んでいる場合がありそうです。単に、私たちがまだ体験していないために不必要に「行ってはいけない」と思っているだけなのかもしれません。

もっとも注意すべきは、カラを突破することを自分で勝手に諦めたまま、カラの内側にいることに慣れすぎてしまうことです。外の世界にそこがれを持ちながらも、臆病さおくびょうゆえに、中にとどまってしまう姿勢に凝り固まってしまうことが心配です。

フランスに「卵を割らなければ、オムレツは食べられない」という格言があるそうです。卵を割るのは「カラを破る」のと同じです。新しいことをするにはそれまでのものを壊さなければならぬ、ということを教えています。この格言は、『岸恵子自伝』(岩波書店)の副題になっています。いくつものチャレンジをしながら多彩な活躍してきた岸恵子さんは「カラを破る」ことを自分に言い聞かせてきたことがわかります。

「カラを破る」制度

動物は多くの場合、本能によって親が子を育てます。カラを破る行為を親が手伝うことが

本能の中に刷り込まれています(コラム2参照)。けれどもそのような本能が希薄になった人間は、学校制度を作りました。日本では幼稚園から小学校、小学校から中学校、中学校から高校、高校から大学や実社会というように、いくつかの段階を経ます。これがちょうど、カラを破ったり、脱皮をしていく過程に相当しそうです。

幼稚園の入園式や卒園式、小学校、中学校、高校、大学で入学式や卒業式がありますが、これらは、すべて「カラ」を破る節目を象徴しています。これ以外に日本では、子どもの成長を祝う節目や、七五三の行事など、子どもの成長段階の節目があります。

入学式や卒業式の、校長先生らの大人の「お祝いの言葉」には必ず、皆さんの成長に触れた文言もんごんがあります。つまり、「カラ」を破って次のステージに行くことについての心構えを伝授していると言つてよいでしょう。

カラを破ることを周囲にはっきりと示す行為はいろいろな社会にあります。日本の成人式(昔は「元服」げんぷく)という男子の儀式がありました)も本来はそのような意味がありました。命綱をつけて高所から飛び降り、地面や水面すれすれのところまで落下させるバンジージャンプはもともと、子どもが大人になるための儀式だと言われます。まわりの人に勇気を示すこと

で、大人であることが認められる通過儀礼だそうです。カラを破る象徴と言えます。

バラの育て方、桜の育て方

ここで問題が起きます。動物の行動を支配する本能と違って、人工的に作られた学校教育では、子ども一人ひとりのカラを破るタイミングをうまく知ることができないのです。自然界では、カラを破るタイミングはあらかじめ個体に組み込まれていますが、人間社会ではこれが難しい。私たちがカラを破ることに苦労したり、失敗したりするのはこのせいです。

学校の授業を思い出してください。例えば1学級30人ぐらゐの生徒がいるとして、皆が皆、授業のペースに合っているわけではありません。仮に半分ぐらゐの生徒が先生のペースに当てはまるとしても、4分の1の生徒は授業が簡単すぎると感じ、残りの4分の1の生徒は授業にまったく付いていけなかったりするではありませんか。

学び手の成長や希望、願望、悩みなどおかまひなしに、授業は進みます。学校で行われる多くのことは、多数の人のためのもので、学ぶ人一人ひとりの寸法には合っていないもので

す。乱暴なたとえですが、バラにはバラの育ち方があり、桜には桜の育ち方があるのに、水や肥料を同じように与えようとするのが学校というところなのかもしれません。

だから、皆さんが「個々に」カラを破る必要が出てきます。ところが残念なことに、上手にカラを破る方法やタイミングは本人にはもちろん、親も学校の先生にもなかなかわからないのです。

人間は、社会という複雑さの中で生きています。社会の中での「生き方」は個人に属すことです。ですから、学校にうまく合う子どももいれば、そうでない子どもがいるのは当たり前のことです。そもそも、子どもが大半の時間を過ごす家庭の状況がそれぞれ違います。例えば、大家族で育った人は、一人っ子の気分を想像することはとても難しいです。その反対も同じです。カラに気付きながら、どのタイミングでどのように破ればよいのかわからず、子どもが「もやもや」感を持ちながら、過ごすことになります。

「あなた」を生きるのはあなただけ

だからと言って、いつまでもカラをまもったまま、成長することを放棄して、カラの中の生活に安住することもできません。地味な服装をしていると、目立つことがないので、誰かに冷やかされたり、攻撃されることもないかもしれませんが、ずっと不本意なまま、昨日と同じ生活を明日もあさっても送ることになるのかもしれない。

私は、自分の人生では自分が主役でありたいと思っています。可能な限り、自分がやりたいことをやり、食べたいものを食べ、行きたいところに行く、住みたいところに住む、つまり自分が思い描くライフスタイルに向けて主体的に生きることが大切だと思っています。

「あなた」という人間の人生を生きるのはあなただけです。いつも他人の目を意識したり、いつも誰かが作った基準に自分を当てはめて、日々を過ごすのはつまらないですよ。

そもそも、どこかのタイミングで自分自身で独り立ちすることが求められます。親や兄弟、親戚はいつまでもあなたの面倒をみてくれません。つまり自立しなければならぬのです。

「自立」というと、学校を出て社会人になる、つまり経済的な自立を思いうかべるかもしれませんが、実は子どもの時から、自分はどう生きるかということ、つまり精神的な自立について折に触れ考えていくことは大事だと思います。

幸福になる義務

1章で、私の勤め先の大学で、学生たちがどうやって学部や学科を選んでいるのかという話をしましたが、親や高校の先生のすすめとは異なった、潜在的には自分なりの願望を持っている人は多いものです。

「熱帯魚の仕事をしたい」「街で一番のパン屋になる」という願望を持っていても、親の意向や友人の手前、あるいは就活情報をもとに仕事を選びそうです。就職した後の人生のさまざまな岐路においても、世間体や親の意向、友人の「いいね」が大きな判断材料になる可能性は高いと思います。

そうすると、長い人生の中で一体いつになったら、「やりたいこと」を選択するのでしょうか。

コーヒーか紅茶か、ハンバーグかステーキを選ぶことなら、たとえ間違っただとしても実害はないかもしれません。失敗しても数時間もすれば、忘れてしまうことが多いでしょう。

けれど、「大学を選ぶ」「学部を選ぶ」「職業を選ぶ」「パートナーを選ぶ」「住むところを選ぶ」など人生にとって大事なものは、自分で決めるべきことからですよ。親や兄弟姉妹や友人が決めるのは本筋ではありません。これらは全部、選んだ後で、「違ってたじゃないか」と誰かのせいにすることはできません。

フランスの哲学者アラン(1868~1951)は、人間は「幸福になる義務がある」と言っています。権利でなく「義務」です。権利ならば、それを「行使する」「行使しない」があなたに任されてしまいます。自分の軸が弱いと、「幸福」が他人との関係でうやむやになってしまいます。下手すると、誰か他の人のために自分の幸福をあきらめてしまう事態になります。だけど、「幸福になる義務」であれば誰もが幸福な状態でいなければならないことを意味します。義務は全員に課されます。つまり、皆が皆、幸福であるべきことを意味しそうです。

幸福の定義はまちまちですが、私は「機嫌の良い状態」だと捉えています。「機嫌が良い」と感じる時、あなたは主体的です。他人の尺度は入り込んでいません。あなたが、「あなた」を生きていることを意味します。幸福を追求するためには、あなたの人生において、あなた

が主役でなければならぬことがわかると思います。

コラム2

親鳥とひな鳥の共同作業

カラ(殻)の中にいるひな鳥は、成長過程のある時点で、自分のくちばしでカラを内側から「もう外に出るよ」とツンツンと音をたてつつくそうです。それが合図となって、親鳥が外から「じゃ、出ておいで」とつついて、ひながカラを破るのを手伝います。

本能がそのように決めているのですね。親子の共同作業でカラを破り、中にいるひながこの世に出てきます。

この呼吸がぴったり合うことを「啐啄同時そつたくどうじ」と言います。「啐そつ」はひな鳥がかえろうとする時に卵の中からつつく音のことです。「啄たく」は、親鳥がくちばしでつつくことを意味するのだそうです。

卵の内側と外側とで同時に何かが起きることで、劇的な展開が訪れます。ちょっと難しい

四字熟語ですが、古代中国人の観察眼の鋭さに敬服します。

本能にしばられない人間は、親子の共同作業でカラを上手に破ることができません。タイミングが合わず、「親離れ」「子離れ」がうまく行きません。子どもの反抗期が表面に出てくる場合もあれば、そうでない場合もあります。中の子どもがカラを破らないままの状態が続く場合もあります。成長の過程で「カラを破る」のは本当に難しいと感じます。

宮武久佳

1957年大阪市生まれ。共同通信社(記者・デスク)に25年勤務したのち、横浜国立大学教授を経て、現在、東京理科大学教授。ハーバード大学ニーマンフェロー(全額給費客員ジャーナリスト)、2002年FIFAワールドカップ日本組織委員会報道部長などを歴任。法政大学、東北学院大学、嵯峨美術大学で非常勤講師を兼任。同志社大学卒業後、カリフォルニア大学(ロサンゼルス校)大学院を経て、国際基督教大学大学院(美学・芸術学)修士、一橋大学大学院(経営法)修士。専門は知的財産論、メディア・ジャーナリズム論。著書に『知的財産と創造性』(みすず書房)、『正しいコピペのすすめ』(岩波ジュニア新書)、『わたしたちの英語』(青土社)、『「社会人教授」の大学論』(青土社)、『著作権ハンドブック』(共著、東京書籍)など。

自分を変えたい

— 殻を破るためのヒント

岩波ジュニア新書 944

2021年12月17日 第1刷発行

著者 みやたけひさよし
宮武久佳

発行者 坂本政謙

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
ジュニア新書編集部 03-5210-4065
<https://www.iwanami.co.jp/>

印刷・三陽社 カバー・精興社 製本・中永製本

© Hisayoshi Miyatake 2021
ISBN 978-4-00-500944-2 Printed in Japan